論文

明治国家と東京
―幸田露伴と永井荷風―

内藤 辰美

Meiji-State and Tokyo in ROHAN and KAFU

Tatsumi NAITO

公共市民の形成は現代日本における喫緊の課題である。一方、真の個人主義の確立も期待される課題である。露伴は公共的市民の必要を認め、荷風は私生活主義を実践した。本論は露伴と荷風を通じ、現代日本の課題に、社会学的検討を行なおうとするものである。

キーワード：露伴、荷風、明治国家、東京、公共市民、私生活主義

はじめに

私は、ここしばらく、現代日本が、ラルフ・ネーダーのいう「公共市民」の形成、すなわち、自分や自分の家族のことに関心を集中させる市民「私的市民」とは対照的な、公共の利益を考えることのできる市民の形成という課題を意識してきている（R.Nader. *1972*、内藤辰美 2011）。

そうしたなかで、現代の日本には、「公共」への関心と「真の個人主義」の確立が必要であると感じてきた。そして夏目漱石のいう「自己本位」（夏目漱石：2001）やハンナ・アレントのいう「私的生活領域のもつ重要性」という問題には特別の留意が必要であるとも考えてきた。周知のように、ハンナ・アレントによれば、私的領域を取り除くことが、人間にとっていかに危険なことであるかということを理解しなければならないという。すなわち、私的な所有物は、毎日、使用され、消費されるものであって、共通世界のどの部分よりもはるかに切迫して必要とされるのだと。私有財産は、共通世界で行われる一切の事柄から身を隠すだけでなく、公に見られたり、聞かれたりすることから身を隠す唯一の場所である。すべて他人のいる公的な場所で送られる生活は、よくいうように、浅薄なものになる。こういう生活は、たしかに、他人から見られ、聞かれるという長所をもっているが、非常に現実的かつ客観的意味での生活の深さを失うまいとすれば、ある暗い場所を隠したままにしておかなければならない（Hannah Arendt 1994：100～101）。ともすると「公共」の視点を重視するあまり、「私的生活領域のもつ重要性」を忘れがちである。私の考えでは、ネーダー（R.Nader）のいう公共市民と漱石の自己本位やアレントのいう私的領域の重要性という問題は、両立しうる、あるいは両立させなければならない一つの社会学的課題である。小論は、露伴と荷風を介して、その課題に迫ろうとするもの

である。

Ⅰ　露伴『一国の首都』における東京

露伴の『一国の首都』は、明治国家の理想を掲げ、首都としての東京のあり方を論じた都市論の傑作である。それは新しく誕生した明治国家と国民に対しては首都の存在意義を認識させ、新しい国家と国民に誇りをあたえようとする試みであった。露伴にとって、国家に威信がなく国民に誇りのない国家は不幸であった。そこには露伴の明治国家に対する危機意識と期待を読み取ることができる。『一国の首都』は、ひたすら欧米に追従し外見のみの近代化を進めようとする明治政府の政策に、すなわち、言葉を換えて未だ後進性をとどめ首都としての偉容をもたない東京に対する、厳しい叱責とも檄とも読める内容で、それは、西洋思想の押しつけを排除し日本の首都は「こうあるべし」と主張する真摯な提言であった。

露伴にとって新しい首都の創造は緊急かつ重大な課題であった。露伴の眼には、東京が、新しい国家の首都に相応しい条件を備えていないと見えていたのである（幸田露伴 1993：7～8）。露伴の東京を見る目は詳細かつ正確で、その観察力には驚かされるばかりである。露伴の首都論は、抽象的な理想論の域を超えていて、今日なお、東京を論ずる者に示唆するところが少なくない。それは裁判所、区役所などの諸機関、郊外、建築、公園、塵埃・糞尿の排除・衛生問題、上下水道、消防、共同浴場、遊郭と醜業者問題、劇場の所在、芸妓の住処等都市計画全般に及ぶものであって、実に壮大なものであった。そうした中にあって、露伴がその必要を特に強調したのは下水道の整備である。「悪水排泄方法の完備の必要は、衛生上むしろ飲用水供給の方法の完備よりも必要なり。けだし衛生上忌むべき害毒の伝播は、悪水排泄の方法の不完全に基因すること少なからざるべきこと、衛生上の知識に乏しきものも想像し得るところなり。下水工事のほゞ成りたる地は自ら乾浄清潔にして健康に適すべきこと一見して知るべきに反し、本所深川下谷浅草等の区内の卑湿の地の不快なる光景は、連日の快晴にもかかはらず溝渠の濁水まさに溢れんとして悪むべき臭気常に発し、土地は乾燥するということなくして常に霖雨季節の観をなすが如き、一見して健康に適せざるの地たるを知るべし。これらの地を常として、一霎時（しょうじ）の雨にも溝は忽ちその排泄の働きを為すに暇あらずして，汚穢不潔の水は街上に氾濫し、而して塵埃蓄積処の塵埃をも人家の糞便をも伴いひて流動す」（幸田露伴 1993：90）。

露伴が『一国の首都』を公刊した明治32年（1899）当時の東京は寄留人口が増大し、露伴の脳裏にある理想の都会から距離をおいていた。露伴の東京への関心は物理的状態だけでなく社会的状態にも向けられた。「明治の運命の寵児となって東京に入りたる地方人の一群は、今日においても、猶自己中心に過るの傾きを有せざる歟（や），凡てに冷淡なる傾きを有せざる歟，所謂町内の交際をも蔑視する傾き無き歟、産土神の祭典にも同情せざるが如き傾き無き歟、都会はただ功名を漁すべき地と化してしまっていた。潮のごとき圧倒的寄留人口の増大に「江戸以来の土着住民」はややもすれば萎縮してしまっていた。それではいけない。新しい住民と手をたずさえて一国の首都に相応しい東京を実現する母体とならなければならないと露伴は主張した。そして東京を「人間集会地」や「腰掛け若しくは足溜り」の都市にしてはならないと力説したのである。さらには東京住民の愛郷精神の養成こそ、すべての「基礎根柢」と説いたのであった」（小木新造 2006：247～248）。

露伴はいう。「首都が全国に及ぼす勢力は是（かく）の如く大にしてかつ烈し。然らば首都の状況悪しからんには、全国は直ちにその悪影響を蒙るべきこと極めて明らかなることなり。さらば首都に対するの観察を等閑にするは、必ず智者の肯

（あえて）せざるところなるべし」（幸田露伴 1993：10）。「首都が全国に及ぼす影響の事は姑（しばらく）これを擱きて（おきて）、他の一面、即ち全国が首都に対する関係を考へんに、不健全なる身体は健全なる頭脳を有せざると同じく、疲弊せる国民の繁盛なる首都を有すべき理もなく、富力及び徳力智力の充実せる国民は決して悪しき首都を有すべき理もなし」（幸田露伴 1993：10）。「以上の二面の観察によれば、首都は実に一個人の住居の住居若しくは腰掛若しくは足溜り等たらざるのみならず、また首都は即ち首都なりとして単に自体を存せるのみならず、一面には全国の指導者として、一面には全国の代表者として存するものにあらずや。かゝれば首都は首都に住する民の有する首都たるのみならず、全国民の有するところの首都たること論なきなり」（幸田露伴 1993：11）。「詩人及小説家等は、ややもすれば都府を罪悪の巣窟の如く見做し、村落を天国の実現の如く謳歌す。何事につけても観察力のみ鋭敏に過ぎて施為（しい）の能に乏しきを常とする詩人小説家等の、都会を好む能（あた）はずして村落を愛するに至るべき勢ひ然るべき事ながら、悪しきものをば悪ししとのみ擲ち（なげうち）捨てんは仁恕（じんじょ）の道にあらず」（幸田露伴 1993：11～12）。「然らば今の帝国の首府たる東京の状況如何。・・・吾人にして意聊（いささか）か満足すればやむ、然らずんば終に言なくしてやむ能はざるなり」（幸田露伴 1993：12）。露伴にとって東京の問題は一東京問題にとどまらず、日本国家の問題であった。賢明な洞察力と云わなければならない。

東京を首都として機能させるためには何が必要か。露伴は都府に対する人民の「愛」を説くのである。「見よ、愛さるるところのものは狗（いぬ）だにその毛輝き、愛されざるものはその尾も力なし。愛は日の光なり、これに浴するものは生長し発達し繁栄す、これに浴せざるものは衰老し萎縮し凋枯（ちょうこ）す。都府既に人間の建設にかかる以上は、愛の厚薄有無によって善悪栄枯の状況をなすべき事必然の数なるに疑ひなし。然らば都府の状況を考ふるに先立って、人民が都府に対する愛情の如何を考ふべきは当然の順序にして、都府について言を為さんとするものの必ず注意すべき一点ならずや。いはんや都府の状況をして善美ならしめんと欲すれば、人民をしてその都府を愛せしむること一切の施為の基礎根柢たらざるべからざるをや」（幸田露伴 1993：12～13）。「今の東京市民及び我那一般の人民は、果して我が帝国の首都たる東京に対して真摯厳重なる意義においての愛情を有せりや、否や。往時のいはゆる江戸児が江戸を愛したる如き、燃ゆるが如き意気情熱を以て今の市民は我が東京を愛せるや、否や」（幸田露伴 1993：13）。「これ東京の江戸に比して愛するに足るべき状況を具せざるを以てなる乎（か）、東京その物のなほ混沌として七竅（しちきょう）いまだ成らざる乎（か）。けだし東京はなほ未製品なり。この故に我が東京児なりといふが如き場合の少かるべきは当然の事に属す」（幸田露伴 1993：14）。露伴はそのように述べ、江戸にあった都府に対する人民における愛の必要を、東京にも求めるのである。それは正に、社会学的な都市政策論、東京論、東京市民論の展開であったといってよい。

露伴の『努力論』にも注目しよう。私見によれば、『努力論』は『一国の首都』に掲げたところを如何に実現するか、その実践論であり、期待される市民論である。そう理解することができる。新しい国家の首都、東京の形成を、露伴は単純なものまね路線に求めていない。新しい国家の基盤を作るために何が必要か。それは「努力」である。運命に支配されず運命を造る努力である。露伴の努力論は運命を造る「英雄的気象」論である。「とにかく運命前提論などには屈服し難いのが、人の本然の感情であるということは争われない。吾人

はあるいは運命に支配されて居るものであろう。しかし運命に支配されるよりは運命を支配したいというのが、吾人の欺かざる欲望であり感情である。然らば即ち何を顧みて自ら卑うして自ら小にせんやである。直ちに進んで自ら運命を造るべきのみである。是の如き気象を英雄的気象といい、是の如きの気象を有して，終にこれを事実になし得るものを英雄というのである」(幸田露伴 2010：29)。

露伴の努力論はがむしゃらな前進論ではない。「注意深き観察者となって世上を見渡すことは、最良の教えを得る道である。失敗者を観、成功者を観、幸福者を観、不幸者を観、而してある者が如何なる線綫を手にして幸運を牽きだし，ある者が如何なる線綫を手にして悲運を牽き出したかを観ると時は，吾人は明らかに一大教訓を得る。これは即ち幸運を牽き出し得べき線は、これを牽く者の掌（たなごごろ）を流血淋漓（りんり）たらしめ、否運を牽く出すべき線は滑膩油沢（かつじゆうたく）なる柔軟なものであるという事実である。即ち幸運を牽き出す人は常に自己を責め、自己の掌より紅血を滴らし、而して堪え難き痛楚を忍びて、その線を牽き動かしつつ，終（つい）に重大なる体軀の幸運の神を招き致すのである」(幸田露伴 2010：33)。露伴は幸運を牽き出すために自己を責めることを求めるのであるが、それはさらに自己の革新に及んでいく。露伴は自己の革新を他によるものと自らするのとの二つ道があると言い、他による自己革新に意義を認めつつ、自らによる革新を、真の革新と見なしている。ここで大事なことは、露伴が「自己革新」と「幸福」を一体として考えていることである。露伴によれば、幸福と自己革新は表裏一体のものであったが、注目すべきは、露伴の幸福論が具体的なことである。露伴は幸福を、惜福・分福・植福の三つに分けて考察する。その考察は、今日の福祉社会の在るべき姿を見通していたかのようである。

もう少し露伴のいうところ聴こう。露伴のいう幸福論の第一は惜福の説である。「惜福とは何様（どう）いうのかというと、これを浪費に使い尽くしてしまわぬをいうのである。・・・畢竟福を取り尽くしてしまわぬのが惜福であり、また使い尽くしてしまわぬが惜福である。・・・個人が惜福の工夫を欠いて不利を享くる理は、団体もしくは国家においても同様でなければならぬ。水産業は同様である。貴重海獣の獲得のみに力（つと）めて保護に力めなかった結果は，我が那沿岸に獣虎膃肭硒臍（らっこ・おっとせい）の乏少を来したではないか」(幸田露伴 2010：56～62)。第二は分福の説である。「分福とは何様であるかということであるかというに、自己の福を得るところの福を他人に分かち能うることをいうのである。・・・惜福は自己の福を取り尽くさず用い尽くさざるをいい、分福は自己の福を他人に分ち加うるのを言うので、二者は実に相異なり、また互に表裏をなして居るのである。・・・己を抑えて人に譲る，是の如き（かくのごとき）は、他の動物には殆どなきところで、人にのみあり得るところである。・・・一瓶の酒、半鼎（はんてい）の肉、これを頒つも頒たざるももとより些細な事である。しかしその一瓶の酒を頒ちあたえられ、半鼎の肉を頒ち与えられた人は、これによって非常に甘美なる感情を惹起されるのであって、その感情の衝動された結果として生ずる影響は決して些細なものではない。甚大甚深なものなのである」(幸田露伴 2010：66～70)。第三は植福の説である。「植福とは何であるかというに， 我が力や情や智を以って、人世に吉慶幸福となるべき物質や情趣を寄与する事をいうのである。即ち人世の慶福を増進進長育するところの行為を植福というのである。・・・予は単に植福といったが、植福の一の行為は自ら二重の意義を有し、二重の結果を生ずる。何を二重の意義、二重の結果というかというに、植福の一の行為は自己の福を植えうることで

あると同時に、社会の福を植えうることに当たるから、これを二重の意義を有するといい、他日自己をしてその福を収穫せしむると同時に、社会をして同じくこれを収穫せしむる事になるから、これを二重の結果というのである」（幸田露伴、同上、80）。もちろん惜福、分福、植福という行為は努力の範疇にあるものであり、露伴はそれを「努力の堆積」に求めている（幸田露伴 2010：91）。

若干の要約である。露伴は明治国家の基盤を作るために国民の「努力」を強調した。露伴が努力に求めたのは幸福である。幸福は、独創的な発想、惜福、分福、植福としてとらえられ、それを「努力の堆積」に求めているのである。露伴には国民の「幸福」を犠牲にして国家の威信を高めようとするような姿勢はない。同時に国民の努力なくして、国威の発揚もない。国民と国家は幸福を、そして理想を追求しなけらばならない。露伴は理想と幸福を社会国家のあり方や国民、個々人の努力に結びつけていた。それは、「公共市民」「公共的市民文化」の形成に向けた努力であった。露伴の努力論はウオード（L.F.Ward）の努力論に比べても遜色のない内容であった（内藤辰美・佐久間美穂 2017）。

Ⅱ　荷風『日和下駄』における東京

以上のような露伴の視点は荷風には欠けていた。『断腸亭日乗』に書かれた荷風の生き方は、幸福をもっぱら個人的なものと認めている。日記を読む限り荷風は天下の大事件 2・26 事件にすら強い関心を示していない。露伴の追求する幸福が、社会と国家の中で考えられる個人の幸福であったのとは対照的に、荷風は個人に徹していて社会とか国家とか公共という意識はない。露伴とは異なり、荷風は首都建設に期待も意欲も示さない。露伴が首都建設に意欲的であり東京という都市を生産的にとらえようとしているのに対し、荷風は対照的で、東京という都市を消費しようという姿勢が濃厚である。露伴も荷風も江戸への愛着が強く維新の政変以降江戸が日ごとに変質していく姿を嘆いている。そして、露伴は嘆きから首都の再建を願い、新しい首都のあり方を論じるのであるが、荷風は新しい東京から意識的に逃避する。これはおそらく露伴と荷風がもった国家との距離のちがいである。荷風はパリ・ニューヨーク・シカゴに遊び（永井荷風 1952a、1952b）、海外の都市事情を知っていたから東京という新しい都市を建設するという仕事に真正面から関心を寄せてもよさそうであるがそれはない。荷風の都市に接する態度は徹して都市の消費者であって、都市を国家と重ねることはない。積極的なものがあるとすれば明治国家と首都東京に対する批判的な態度である。「我国現代における西洋文明模倣の状況を窺ひ見るに、都市の改築を始めとして家屋什器庭園衣服に至るまで時代の趣味一般の趨勢に徹して、転た余をして日本文華の末路を悲しましむるものあり」（永井荷風 2010：9）。「今や時代は全く変革せられたりと称すれども、要するにそれは外観のみ。一度合理の眼を以てその外皮を看破せば武断政治の精神は毫も百年以前と異なることなし。江戸木版画の悲しき色彩が、全く時間の懸隔なく深くわが胸底に浸に入りて常に親密なる囁きを伝ふる所以けだし偶然にあらざるべし」（永井荷風 2010：13）。荷風は「日本都市の概観と社会の風俗人情は遠からずして全く変容すべし。痛ましくも米国化すべし。あさましくも独逸化すべし。然れども日本の気候と天象と草木とは黒潮の流れにひたされる火山の島嶼の存するかぎり、永遠の初夏晩秋の夕陽は猩々緋の如く赤かるべし。永遠に中秋月夜の山水は藍の如く青かるべし」（永井荷風 2010：23）と述べ、泰正の国々を模倣しようとする日本を否定した。

『日和下駄』は荷風が副題に記したように、荷風の「東京散策記」である。この散策記は荷風の

東京観察記でもある。「東京市中散歩の記事を集めて日和下駄と題す。・・・日和下駄は大正三年夏のはじめころよりおよそ一歳あまり、月々雑誌三田文学に連載したりしを、この度米刃堂（べいじんどう）主人のもとめにより改竄（かいざん）して一巻とはなせしなり」（永井荷風1992：181）。荷風は市中の散歩を子供の時から好んでいた（永井荷風1992：181）。「今日東京市中の散歩は私の身に取っては生まれてから今日に至る過去の生涯に対する追憶の道を辿るに外ならない。これに加うるに日々昔ながらの名所古墳を破却して行く時勢の変遷は市中の散歩に無常悲哀の寂しい詩趣を帯びさせる」（永井荷風1992：185）。荷風の散策は、正に、生まれてから今日に至る過去の生涯に対する追憶であって、市中の、川や寺社、建造物から樹木に至るまで、心に刻印されてきた風景をよび起し生涯をかみしめるものであった。そこには、「江戸軽文学の感化」があると同時に「近世次ヂレッタンチズムの影響」もあった（永井荷風1992：187）。「されば私のてくてく歩きは東京という新しい都会の壮観を称美してその審美的価値を論じようというでもなく、さればとて熱心に江戸なる旧都の古蹟を探りこれが保存を主張しようという訳でもない」（永井荷風1992：190）。「元来がかくのごとく目的のない私の散歩にもし幾分でも目的らしい事があるとすれば、それは何という事なく蝙蝠傘に日和下駄を曳摺って行く中、電車通の裏手なぞにたまたま残っている市区改正以前の旧道に出たり、あるいは寺の多い山の手の横町の木立を仰ぎ、溝や掘割の上にかけてある名も知れぬ小橋を見る時なぞ、何となくそのさびれ果てた周囲の光景が私の感情に調和してしばしば我にもあらず立去りがたいような心持をさせる。そういう無用な感慨に打たれるのが何より嬉しいからである」（永井荷風1992：191～192）。荷風は目的のない散歩と云っているが、実は、目的のないこと自体が目的であった。幼き日から幾度となくみて来た風景を心の中から引きだし、それを眼前の景色に重ねあわせながら、荷風が散策に求めたものは、恐らく、「癒されること」と「自己の確認」であったにちがいない。荷風の散歩ではその「癒し」と「自己確認」が、突如、怒りと悲嘆に変ることがある。「私は新開町の借家の門口によく何々商会だの何々何事務所なぞという木札のれいれいしく下げてあるのを見ると、何という事もなく新時代のかかる企業に対して不安の念を起すと共に、その首謀者の人物についても甚しく危険を感ずるのである。それに引きかえてこういう貧しい裏町に昔ながらの貧しい渡世をしている年寄をみると同情と悲哀とに加えてまた尊敬の念を禁じ得ない。同時にこういう家の一人娘はいまごろ斡旋屋の餌になってどこぞで芸者でもしていはせぬかと、そんな事に思至ると相も変わらず日本固有の孝行の思想と人身売買の習慣との関係やら、つづいてその結果の現代社会に及ぼす影響なぞについていろいろ込み入った考えに沈められる」（永井荷風、同上：192～193）。おそらく、荷風にとって散歩は単なる身体運動ではなく、その歩みに、さまざまな世界が生起する、自身のみが感じることのできる、悲嘆と喜びの世界への陶酔であった。荷風は、その世界で、さまざまなものを見る。そして、ともするとわれわれがいとも簡単に見逃してしまう、淫祠、樹、地図、寺、水（渡船）、路地、閑地、崖、夕陽（富士眺望）のような事象・事物を、思いのままに観察し、それに往時の姿を想い浮かばせ、世相の変化とその流れに抵抗なく乗り切れない自分を冷ややかに、しかし満足をもって見つめている。

その試みは深い自己省察に満ちている。「何気なく裏町を通りかかって小娘の弾く三味線に感動するようでは、私は到底世界の新しい思想を迎える事は出来まい。それと共にまたこの江戸の音曲をばれいれいしく電気燈の下で演奏せしめる世俗一般の風潮にも伴って行く事は出来まい」（永井

荷風 1992：194)。「裏町を行こう。横道を歩もう。かくのごとく私が好んで日和下駄をカラカラ鳴らして歩く裏通にはきまって淫祠がある。淫祠は昔から今に至るまで政府の庇護を受けたことはない」(永井荷風 1992：195)。淫祠は昔から今に至るまで政府の庇護を受けたことがないという荷風の言葉には彼の生活思想がある。政府は民衆が政府によって生かされていると想っているが、民衆は政府とは異なる民衆自身の日常を生きている、荷風の主張はそう詠むことができる。「本所深川の掘割の橋際、麻布芝辺の極めて急な坂の下、あるいは繁華な町の倉の間、または寺の多い裏町の角なぞに立っている小さな祠やまた雨ざらしのままなる石地蔵には今もって必ず願掛の絵馬や奉納の手拭、ある時は線香なぞが上げてある。現代の教育はいかほど日本人を新しく狡猾にしようと力めても今だに一部の愚昧なる民の心を奪う事が出来ないのであった。路傍の淫祠に祈願を籠め欠けたお地蔵様の頸に涎掛をかけてあげる人達は娘を芸者に売るかもしれぬ。・・・しかし、彼等は他人の私行を新聞に投書して復讐を企てたり、正義人道を名として金をゆすったり人を迫害したりするような文明の武器の使用法を知らない」(永井荷風 1992：196)。権力や近代の風潮に毒された人びとへ向けられる荷風の目は皮肉に満ちている。荷風が共感を覚えたのは国家ではなくコミュニティ、すなわち、「路傍の淫祠に祈願を籠め欠けたお地蔵様の頸に涎掛をかけてあげる人達の住まう空間」であった。

荷風が描くコミュニティをもっともよく示すのは路地である。「路地は今も昔と変りなく細民の棲息する処，日の当たった表通からは見ることの出来ない種々なる生活が潜みかくれている。侘住居のはかなさもある。隠棲の平和もある。失敗と挫折と窮迫との最終の報酬なる怠惰と無責任との楽境もある。すいた同士の新世帯もあれば、命掛けなる密通の冒険もある。・・・路地はどうかすると横町同様人力車の通れるかどうかと危ぶまれるものもある。もちろんその住民の階級職業によって路地は種々異なった体裁をなしている。日本橋際の本町木原店は軒並飲食店の行燈が出ている処から今だに食傷横町の名がついている。吾妻橋の手前東橋亭とよぶ寄席の角から花川戸の路地に這入れば、ここは芸人や芝居者また遊芸の師匠などの多い処から何となく猿若町の新道の昔もかくやと推量せられる。いつも夜店の賑わう八丁堀北島町の路地には片側に講釈の定席、片側ににには娘義太夫の定席が向かい合っているので、堂摺連の手拍子は毎夜張扇の響に打交る」(永井荷風 1992：242)。

都市と国家は密接な関係にある。そもそも国家の誕生は都市の誕生であった。その国家と都市はコミュニティと関係をもっている。このことは歴史を貫いてみられる真実である。一国の首都における露伴は国家（表）に拘った。一方荷風はコミュニティ（裏）に拘った。露伴は改善の必要を自覚し、荷風はあるがままを消費した。『日和下駄』に描かれた町々はもとより、彼の随筆、「てらじま記」の寺島や、「向島」「深川散歩」「傳通院」などなどは、すべてコミュニティの観察であり、その観察はコミュニティへの深い憧憬に彩られたものであった。表の顔を持たない都市は貧しく貧弱である。裏の顔をもたない都市はよそよそしく安らぎをもたない。都市、特に東京には首都という表の顔と、もろもろのコミュニティという裏の顔、二つの顔がある。荷風が関心を寄せ、好んだのは裏の顔、コミュニティであって、権威を強調する首都東京の表の顔ではなかったのである。

Ⅲ　露伴・荷風における江戸と江戸文化

対照的で、一見対立的にさえ見える露伴と荷風であるが、両者は江戸と江戸文化を高く評価していたという点で通じている。露伴も荷風も江戸と江戸文化への憧憬が強く、維新の政変で江戸が荒

廃し変質していく姿、軽薄な西欧文化と薩長の侍たちの都には似合わない行動を嘆いている。しかし、露伴が嘆きの中にも首都の再建を願い、新しい国家と首都のあり方を論じているのとは対照的に、荷風は新しい東京から意識的に距離を置く。大胆に言えば荷風の場合、前を見ようとする露伴と異なり、後ろ向きで、江戸への逃避に近いものがある。荷風の『江戸芸術論』（永井荷風 2010）は東京からの逃避とその裏側にある江戸の文化（浮世絵）への心酔を示している。

露伴が、幸福論を通じて、「公共的」な市民の形成に拘ったのとは対照的に、荷風は「私生活優先主義」に自己を埋没させた。荷風にとって創造的なものとは、輸入文化のもつ軽薄性を排撃して、伝統文化の深層に民族の美と誇りを見出していくことであった。文化を取捨選択し、評価するところに、荷風のいう創造性があった。時の流れに身を委ねることなく、消えゆく江戸の文化に想いを馳せ、欧化に傾斜する日本を悲観的にとらえていた荷風。荷風は、彼が認識するすぐれたもの、即ち、江戸と江戸文化が消えていくことには深い悲嘆の観念を示し、新しく生起する東京と東京の有り様には嫌悪に近いものをもっていた。「新しき国民音楽いまだ起こらず、新しき国民的美術なお出でず、唯だ一時的なる模倣と試作の濫出を見るの時代に於いては、元よりわが民族的芸術の前途を予想する事能わざるや論なし」（永井荷風 2010：24）という言葉が、よく荷風の心情を示している。「我国現代における西洋文明模倣の状況を窺ひ見るに、都市の改築を始めとして家屋什器庭園衣服に至るまで時代の趣味一般の趨勢に徹して、転（う）た余をして日本文化の末路を悲しましむるものあり」（永井荷風 2010：9）。

明らかに、荷風は明治における欧米化を歓迎しなかった。誤解の無いようにいえば、露伴が欧化主義者でなかったことも記しておく必要がある。露伴は明治国家の新しい首都に並々ならぬ関心を寄せていたが、江戸文化の衰退を悲観的に眺めていて、東京を外国の首都に似せて創ることを望んでいなかった。露伴は、荷風同様、徳川に代わり江戸を支配した薩長の侍たちの下卑た態度が江戸と江戸文化を侵食するとき、そこに猛烈な嫌悪の感情を示すとともに、安易な文明開化で江戸を作り直すことに反対であった。江戸がもった洗練された文化を評価し、それを守らなければならないと考えていた点で両者は共通する。露伴にとって、何よりも耐え難いものは、帝国の首都にかつて江戸っ子が示した江戸に対する愛着がみられないことであった。もちろん、首都におけるその不衛生なる環境をはじめ東京は誇るべきものを失くしていた。露伴にとって、民族の誇りとして首都の再建は急務であった。それが『一国の首都』を貫く露伴の精神であった。

東京に対する露伴と荷風の二人の目線は対照的であったが、それは多分に二人が明治国家に対する意識を異にしていたためであり、生活信条とも言えるものを異にしていたためである。およそ明治という時代を生きた人間で国家を意識しなかった者はひとりもいない。しかし国家を意識する仕方は区々であった。国家を自己と一体化した者から、ひたすら国家と距離をおいた者、国家に反逆を試みた者までいた。抑々（そもそも）明治国家の形成自体、討幕から西南戦争をはさんで戊辰戦争まで実に様々な理想をもった人々の思惑が絡んでいた。そのことを思えば、出来上がった明治国家が初めから一つでなかったことも明らかである。国家の首都と定められた東京についてもイメージは複数であった。江戸から東京へと名前を変えた都市が明治国家の首都として民衆の間に定着したのは新しい国家がその基盤を固めた明治20年代以降のことであって、その間の東京は江戸と同居していた都市であった。露伴のように新しい国家に相応しい首都の建設を急がなければならないとみる者は新しい国家の建設がこれからの

日本の運命を左右するほどの重大事と認識したが、荷風のような変化を堕落とみていた者にとっては、新しい首都は堕落の象徴であった。彼の日記にはそのことがよく記されている。

昭和7（1932）年4月23日。「一昨昨夜銀座にて人を殺したる男は下谷に居住する夜店地割人の親方にて俗にテキ屋と呼ぶ者なる由。昨日捕縛せられし由。新聞紙は太訝楼より口留を贈りし故詳細なる事は記載せず、唯怪我人ありし事を記したるのみなりといふ。以上の事は昨夜電車の中にて乗客の語るところを立聞きしたるのみなり。近年銀座界隈にてつまらなき喧嘩のため人の殺されし事再三に及べり。余が耳にせし所によれば、二、三年前黒猫酒肆（しゅし）の入口往来にて白昼匕首にて刺殺せしものあり。また銀座裏通書籍おろし売北隆館の店頭にて荷づくりをなしてゐたる店員の無頼漢の喧嘩を仲裁せむとして一人の店員は鼻をそがれ、一人は急処をさされて即死せしことあり。その他，麦酒壜にて頭を打割られし噂は数かぎりなきほどなり。いずれも原因はつまらなきその場の言争ひより起こりて徒に血を流し生命を失うなり。かくの如き事はむかしより今にいたるまで日常絶えざるはなしにて更に奇となすに足らざるなり。血を見ろ事を好む日本人の特性なるべし。繁華の町にありては酒楼の喧嘩となり、田舎にありては博徒の出入り、請負師土方の喧嘩となる。されば戦争に臨みて日本人の勇猛なる事野獣の如くなるもまた更に奇となすに及ばず。この席上海の戦争にて勇名を轟かせし兵士尠からざるはけだし当然の事といふべし。何事も利害は相反するものなり。戦争に強ければ銀座の血まぶれ喧嘩は免れざる事と知るべし」（永井荷風 2002：254～255）。

昭和7（1932）年3月25日。「曇りて風なほ寒し、黄昏銀座於倫比克（オリンピック）洋食店に飯す。この店三、四年前開業してより今日に至るまで、連日食事の時刻には空席なきほどの盛況なり。主人は多年米国沙市にて飲食店を営みゐたるものの由。客は男女事務員店員学生等にて、東京の言葉をつかふ者は甚少なく、また行儀作法を知るもの殆どなし。我国文化の程度はこの店の客の食事する様を見てもその一班を窺うに足るべし。大正改元の頃余は亡友唖唖子と折々日本橋通の花村または浅草駒形のどぜう屋などに往きて食事せしが、その頃には職人小商人のごときものの食事をするさま、今日の男女事務員などに比すれば，遥かに優長にて互いに礼儀作法を守りゐたり。二十年来風俗人情の変化実に驚くべし。余は平素世人と交わらざるを以って折々このオリンピック洋食店に入り、現代民衆の動作会話を観察して、時に得る所あるを喜ぶなり」（永井荷風 2002：250）。

昭和10（1935）年6月16日。「英国外交官アーネスト・サトウの維新外交史は幕末維新の事を白むとするもの必ず、一読せざるべからず良書なり。日本人の著述には見ること能わざる秘事多きのみならず、その観察飽くまで公平にしてその記事極めて率直なれば、読み行く中に時代の変遷するさま、さながら大河の岸に立ちて流れ行く水を見るが如き思ひをなさしむ。これ邦人の著書に就いては決して見ること能わざるものなり。維新の変革を記述したる邦人の著書には必悲憤慷慨の文字多く挿入せられ、薩長志士の行動を無理無態に称揚し、これを英雄として崇拝せしむるに過ぎず。これに反して西洋人の文には偏狭なる道徳的判断少なく、じじつをそのまま忠実に記載する事を主となすを以って，読後の印象鮮明にして、感慨もまたかえって深刻なるものあるなり。余は明治維新の史伝に就いて邦人の著わしたるものに手は、岡本千の『尊攘記事』と田口鼎軒の『日本開化小史』とを以って公平無私の良書となすなり」（永井荷風 2002：323）。

露伴と荷風はそれぞれに大家で個性的であったから共通点を探がすのは難しい。しかし共通する

ところがなかったわけではない。二人は江戸を愛したという点で共通する。そして、ともに、東京の支配者となった薩長の侍が嫌いであった。特に、荷風は軍国主義者西郷（隆盛）が大嫌いであった。昭和19（1944）年8月4日。「戦乱を好む事はこの国民の特質なるべし。平和を重んじたる江戸時代において戦争をます事能わざる時都会にては消火人夫（町火消）の闘争あり。地方の村邑（そんゆう）には博徒の喧嘩絶える暇なし。この度の戦争はその原因遠く西郷南洲の征韓論に萌芽せしものと見るも過ちには非ざるべし」とまで言い、西郷を罵倒する（永井荷風2002：235）。

露伴と荷風の生き方には、東洋思想を重視した露伴、西洋思想と文学に身を寄せた荷風というちがいもあって、国家・社会観・人生観にもちがいがあった。露伴に＜個人主義＞の生き方や＜生活信条＞がなかったわけではない。ただ露伴の場合、それは、国家・社会を意識した上でのことであった。一方、荷風はこの時代を生きた者には珍しくその生き方は個人主義に徹していた。家も国家もかれが拠り所とするものではなく、守るに価しないものであった。国家・社会のために奉仕するというようなことにも価値を認めることはしなかった。その生き方や生活信条には、露伴が『努力論』で説いたような精神を荷風は持っていなかった。というよりそのような精神とは無縁であった。露伴と荷風には直接的な接触、交流はなかったようである。しかし、荷風にとって露伴は深い知識と日本の美に深い理解を示した巨人であった。特に日本近代がもった優雅な江戸文化の否定と殺伐たる姿は荷風にとって絶え難いものであったから、露伴は心のよりどころであったとさえ思われる。

露伴、荷風の二人の共通点は、隅田川、墨東に対する愛着であったかもしれない。露伴も荷風も隅田川の東京、わけても墨東を好んでいた。露伴は向島に居住し、荷風は向島と墨東を楽しんだ。二人を結びつけいていたものに「隅田川」、「墨東」という世界があった。荷風は墨東の風景に惹かれていた。そしてその風景の中に露伴を見た。「私はこれらの記事を見て当時の向嶋を回想するや、ここにおのずから露伴幸田先生の事に思到らなければならない。そもそも享保のむかし服部南郭が一夜月明に隅田川を下り「金竜山畔江月浮」（きんりゅうさんはんにこうげつうく）の名吟を世に残してより、明治に至るまで凡二百余年、墨水の風月を愛してここに居を卜（ぼく）した文雅の士に勝（あ）げるに堪えない。しかしてそが最終の殿（しんがり）をなした者を誰かと問えば、それは実に幸田先生であろう。先生は震災の後まで向嶋の旧居を守っておられた。今日その人はなお、矍鑠（カクシャク）としておられるが、その人を日夜見て娯しみとなした風景は既に亡びて存在しない。先生の名著『讕言長語』（らんげん）二巻は明治三十二、三年の頃に公刊せられた。同書に載せられた春の墨堤という一篇を見るに、「一、塵いまだたたず、父なお湿りたる暁方、花の下行く風邪の襟元に冷ややかなる頃のそぞろあるき。二、夜ややふけて、よその笑ひ声も絶つる頃、月はまだ出でぬに歩む路明らかならず、白髭あたり森影黒く交番所の燈のちらつくも静かなるおもむきを添ふる折ふし五位鷺などの鳴きたる。何心もなくあるきたる夜、あたりのもの淋しさにふと初蛙の声聞きつけたる。1.雨に名所の春も悲しき闇の中を街燈遠く吾妻橋まで花がくれに連なるが見える。1.日ごろは打絶えたる人の花に促されてなど打興じながら紫の戸を排き（ひらき）入り来る。1.裏道づたひづくともなく行くに、いけがきのさま、折戸のかかわりもいやしげならず、また物々しくもあらぬ一構の奥に物の音のしたる。右いづれかをかしかざるべき。明治三十一、二年の頃隅田堤の桜樹は枕橋より遠く梅若塚のあたりまで間隙なく列植されていたので、花時の盛観は江戸時代よりも遥かに優っていたと言わなければならな

い。江戸時代にあっては桜花はそれほど綿密に連続していなかったのである」（永井荷風 1986：181～183）。

豊かな漢語の知識で漢学の世界と中国の古典を楽しんだ露伴。フランス語を得意としてシカゴ・ニューヨーク・パリに遊びフランス文学を人生の友とした荷風。性格は違っていたが都市と川（隅田川）に「知」と「情」の世界を投射していた点では通じている。

露伴は家庭生活に満足ではなかったにしても再婚までもして家庭の存在を認めていた。娘の躾にも厳しいものがあった。一方、荷風は家族を捨てた。家というものを捨てた。露伴も荷風も文人として巨人であった。しかし二人の生き方は重ならなかった。露伴は出入りの職人との交流も楽しんだし、釣りの好きな露伴は船頭とも昵懇であった。「根岸党」を結成し、文人たちとの酒の席も楽しんだ（出口智之 2011）。一方、荷風の場合鷗外を師と仰ぎ鷗外の遺書を意識していたようである。しかしその鷗外とも酒を酌み交わすようなつき合いではなかった。わずかに谷崎と気を許す仲ではあったが、伊藤春夫を遠ざけたように好き嫌いが激しかった。荷風は、芸者や踊り子たち、囲われた女性たちに特別の親近感を懐いていた。それは露伴にはなかったことであり、露伴と荷風にとってもっとも対照的な面であった。露伴と荷風との関係はどうであったか。「荷風と露伴の間柄を見ると、戦後偶然、市川の菅野で互いに間近に住まうことになったが、両文人が顔を合わせることは終になかった。・・・しかし幸田文の随筆によると、露伴・文の父娘は、荷風についてのうわさ話はよくしているようであった。・・・また露伴は荷風の『墨東奇譚』を読んで「涼しい文章だ」と評し、娘の文にも読むことを薦めている。一方、荷風も露伴の作品を読み、尊敬していた。両文人は互いに相手を認め合っていたのである」（橋本敏男 2009：41）。荷風は露伴の葬儀には参列せず、一人，距離を措いてをひそかに見送ったという（橋本敏男 2009：34～35）。

少し回り道が過ぎたようである。いまや露伴と荷風の期待した東京はすっかり変貌した。近代化路線の結果だけではない。大震災と空襲があった。東京は復興の過程で下町は変容した。荷風の下町は姿を消して行った。戦後も経済成長期を迎えると次第に下町と云う言葉も段々新鮮さをもたなくなった。多分、下町と云う場所が消えたのではなく、下町がもっていた文化に変容があったのであろう。

終わりに―現代における露伴と荷風―

既に述べたように、露伴と荷風の都市論は対照的であった。露伴が正面から、国家から都市を論じたのに対し、荷風は裏側から、コミュニティから都市を論じている。荷風が意識したのは、その日暮らしをする下町の民衆である。石阪幹将は荷風の東京散策について、「散策記とともに勝手気ままなに東京市中を歩きまわってみたいというのが本書の基本的なねらいだが、もちろんそれだけではない。本来はそのようなトレッキング・東京歩きの書であるよりも、むしろ帰国直後の荷風の描いた東京論の読解、探索の試みとして書上げたかった書物なのである」という（石阪幹将 1991：10）。石阪は次のようにも指摘する。「たしかに都市の問題は、1970 年代後半から文学や社会学をはじめさまざまな領域から論じられてきた。現代社会を語ろうとする場合、都市問題は避けられないテーマのひとつだが、それは、われわれの多くが都市化という時代の波を受けざるをえないような地域状況下におかれていることにもよる。制度の抜本的な見直しや変革のないかぎり、都市の今日的な膨張現象はおさまらない。都市論議がつきないのもそのためであろうが、しかし、論議の大半は、＜有用性の機軸＞を逸脱しない範囲での都市論議であって、やはり機能的、効率的

な都市経営の実体を底辺から支えようとするものであった。それは、環境問題にかかわる論議についてもいえることだが、生活至上主義とでもいえるような有用性のネットワークの信奉者たちによってささえられてきた論議だった。もちろん、生活環境の整備や改善は必要だ。しかし、現代の都市にみられるビル群に囲まれた生活空間が、無機質で冷たい感じがするのはなぜだろうか。機能的美しい町並みなのに、なぜ鋭角的な感触ばかりが伝わってくるのだろうか。たんなる錯覚なのか、それとも個人的な気分によるものだろうか。おそらく、荷風が追い求めた都会の＜風景＞とはどのようなものだったのか、そんなテーマをかかげて、東京の街並みを再学習してみたいというのが本書の基本的なねらいである。したがって本書は、都市論というよりも荷風論として構成されている」（石阪幹将 1991：10～11）。石阪の指摘には惹かれるものがある。荷風の都市論あるいは都市の解読には現代の都市論が持たないあるいは現代の都市論では及ばないものがあることはまちがいない。しかし敢えて言えば、荷風の見た都市には、「賛美」されるだけではない面もあることは確かである。荷風の都市論の対象となった都市は、都市として当然備えなければならない要件＝都市に必要なミニマムを欠いていた都市であった。そこには目を覆いたくなる劣悪な衛生状態があり、新しい国家の首都として早急に克服されなければならない課題をかかえた都市であった。露伴が、一国の首都に求めたのは、そうした課題の克服であった。そのことは、荷風の生き方と合わせて、荷風の生き方が「私生活堪能主義」であり真の「個人主義」でなかったことと合せて記憶されなければならない。

斯くいう私も、そうした問題を抱える荷風の持つ魅力に惹かれるのは、そして石阪の見方に賛同するのは、無機質の都市、有用性だけを追求する都市が如何に空虚であり、都市の魅力を持たないかということを、そして、ひたすら国家に従属する生き方が豊かな生活を保障するものでないということを、荷風が教えているからである。淫祠は昔から今に至るまで政府の庇護を受けたことがないという荷風の言葉には彼の生活思想がある。政府は民衆が政府によって生かされていると想っているが、民衆は政府とは異なる民衆自身の生活文化に生きている、荷風の主張はそう詠むことができる。「本所深川の掘割の橋際、麻布芝辺の極めて急な坂の下、あるいは繁華な町の倉の間、または寺の多い裏町の角なぞに立っている小さな祠やまた雨ざらしのままなる石地蔵には今もって必ず願掛の絵馬や奉納の手拭、ある時は線香なぞが上げてある。現代の教育はいかほど日本人を新しく狡猾にしようと力めても今だに一部の愚昧なる民の心を奪う事が出来ないのであった。路傍の淫祠に祈願を籠め欠けたお地蔵様の頸に涎掛をかけてあげる人達は娘を芸者に売るかもしれぬ。・・・しかし、彼等は他人の私行を新聞に投書して復讐を企てたり、正義人道を名として金をゆすったり人を迫害したりするような文明の武器の使用法を知らない」（永井荷風 1992 前出：195～196）という荷風の記述には民衆への深い愛情とともに、国家や都市を批判的にみようとする意志が込められている。一見冷淡に見える荷風にも民衆とコミュニティへの熱いそして暖かい視線がある。

小論の結論である。私は「はしがき」で次のように書いている。＜私の考えでは、ネーダー（R.Nader）のいう公共市民と漱石の自己本位やアレントのいう私的領域の重要性という問題は、両立しうる、あるいは両立させなければならない一つの社会学的課題である。小論は、露伴と荷風を介して、その課題に迫ろうとするものである＞と。

私見によれば露伴の意識した「公共」と「市民」（国民というより市民という方があっている）のあり方は、「自己革新」と「幸福」の問題は、現

代日本ににおいてこそ強く意識されてよい内容である。何故ならば、現代日本は、いまなお、健全な「公共」と「市民」の関係を築いていないからである。健全な公共と市民の関係を築くことができなかったのはなぜか。何よりも「公共」と「市民」、「自己革新」と「幸福」という問題を、在るべき社会・国家像の追求に重ねることができなかったからである。近代から現代に至るまで、われわれの社会と国家に欠如していたのは、露伴のいうような「公共」と「市民」、さらには、「自己革新」と「幸福」の追求であった。

一方、荷風の「個人主義」と「私生活優先主義」は、荷風がそれを予想していたかどうかを別にして、明らかに、戦後日本に支配的な傾向である。昨今の日本、露伴の唱える「公共」よりも荷風の主張する「私生活優先主義」に傾斜している感がある。伝統的家族主義のもとで個人という存在が軽視されてきた日本の近代にとって荷風の考え方と生き方は尊重されてよいものであったが、荷風のそれは漱石のいう「自己本位」＝真の個人主義とは別物であり、全面的に賛同することはできないものであった。しかし、「私生活」が危機にさらされている今日、私生活に執着した荷風の生き方は捨てがたい魅力である。

露伴と荷風という二人は近代～現代に日本が求め、実現しなければならない生き方を提示した巨人であり、現代においてわれわれが大いに学ぶべき先人である。公共の問題を強調するとき、意識しなければならないのは私的領域であり、私的領域の重要性を強調するとき、意識されなければならないのは公共の問題である。公共の領域と私的領域は決して排除し合うものではない。その有用性を認めて、共に確保されなければならない領域である（内藤辰美 2011）。公共的市民文化の形成と真の個人主義の確立が課題となっている日本の現状において、露伴が明治国家の首都に求めた理想と、荷風の戦前を生きた生きざまは、日本都市論の空白を埋める作業においても、一つの社会学的課題としても、記憶されるべきものであろう。

引用・参照文献

石阪幹将 1991『都市の迷路－地図の中の荷風－』白地社

小木新造 2006『東京時代―江戸と東京の間で－』講談社

川島武宜 2000『日本社会の家族的構成』岩波書店

幸田露伴 1993『一国の首都』岩波書店

幸田露伴 2010『努力論』岩波書店

後藤新平 1972「自治生活の真精神」第三版総序（「都市問題」1972 年 2 月号）

出口智之 2011『幸田露伴と根岸党のひとたち―もう一つの明治―』教育評論社

田中義久 1971「私生活主義批判」展望 1971 年 4 月

内藤辰美 2011『生命化社会の探求とコミュニティ－明日の福祉国家と地域福祉－』恒星社厚生閣

内藤辰美・佐久間美穂 2017「レスター・フランク・ウオードとソシオクラシー　―日本における民主主義の再生を求めて　―」社会学論叢第 190 号、日本大学社会学会

永井荷風 2010『江戸芸術論』岩波書店

永井荷風 1992『日和下駄』ちくま書店

永井荷風 2002『断腸亭日乗』岩波書店

永井荷風 1986「向嶋」野口富士男編『荷風随筆集』（上）岩波書店

永井荷風 1952『あめりか物語』岩波書店

永井荷風 1952b『ふらんす物語』岩波書店

夏目漱石 2001『私の個人主義』講談社

橋本敏男 2009『荷風がいた街』株式会社ウエッジ

Arend,H.1958The Human Condition Univ.of Chicago Press= 志水速雄訳 1994『人間の条件』筑摩書房

Nader R.1971、*What can just private citizen do ?* New York Times .3.Nov. 野村勝子訳 1972『アメリカは燃えているか』安芸書房